

未来への文化遺産～世界に誇る野外博物館北海道開拓の村

第4回 北前船が運んだ郷里の生活文化

野外博物館北海道開拓の村 館長(学芸員)
一般財団法人北海道歴史文化財団 事業本部長

中島 宏一 (なかじま こういち)

1992年、財団法人北海道開拓の村(現、一般財団法人北海道歴史文化財団)入職。北海道開拓の村で学芸員として勤務。2016年より現職。



大坂(現、大阪)と北海道を瀬戸内から日本海沿岸を航行して結んだ北前船(西廻り航路)は、寄港地の物資のみならず、本州方面から北海道に移住した人々の郷里の文化も運んできました。今回はその一端をお話します。

1 北陸銀行の北海道進出

富山市に本社を置く北陸銀行。赤い看板が目印の同行の支店やATMが道内各地に設置されているのを見たことがあると思います。なぜ、同行が道内にネットワークを構築しているのでしょうか。

北陸銀行はその前身時代、多くの北前船主たちが経営に関わりました。1876(明治9)年、同行の前身である金沢第十二国立銀行創立願人のなかに、旧加賀藩前田家は別として、経営陣には北前船主たちが名を連ねました。北前船交易の成功には、投機性と商人的な才能が求められていたため、船主たちは銀行の設立と経営に手腕を発揮したわけです。

同行は、1884(明治17)年、売薬業中心の資本で設立された富山第二百三十三国立銀行と合併して富山第十二国立銀行と改称。1897(同30)年には株式会社十二銀行と改称した後、他行より早く北海道進出を果たし、1899(同32)年に小樽支店を開設しました。同行の北海道進出は、富山県と北海道間に多くの物流と移住者の往来があり、経済交流が盛んであったことが挙げられます。特に、富山県から北海道への越中米、わら工品、木綿織物などの移出金額が北海道からの魚

肥などの移入金額を大幅に上回っていたことが要因の一つです。小樽支店の開設にあたっては、小樽の板谷、寿原、函館の高村など多数の北陸出身者が協力し、特に雑穀や海産関係者の支援を受けたため、同支店は雑穀銀行、海産銀行と呼ばれるほどでした。

その後、1910(明治43)年、札幌に支店を開設し、大正期以降になると旭川、江別、深川、函館、帯広、北見、釧路と店舗網を拡大しました。1943(昭和18)年、一県一行主義により中越、高岡、富山銀行の3行と合併して北陸銀行となり、以降、同行は北海道に支店をもつ地方銀行では群を抜く支店数を誇り、昭和期は単独で地銀全国第2位の規模となりました。2004(平成16)年9月、北海道銀行と経営統合して「ほくほくファイナンスグループ」を設立し、グループ全体としては横浜銀行に次ぐ地方銀行第2位の基盤を築いています。

このほか、北前船主たちは北海道拓殖銀行の創立委員などを務めるなど、彼らの豊富な資金力は金融機関にも大きな影響を及ぼしました。



北陸銀行札幌支店

2 富山売薬（富山の薬売り）

富山の売薬商（薬売り）が北海道進出を遂げたのは、まだ蝦夷地の時代の1830（天保元）年頃で、ニシン漁で栄えていた江差で富山の売薬商、才田屋勘七が行商を始めました。松前藩から営業許可を受けた才田屋は江差市中の旅籠を定宿とし、北前船を利用して定宿宛に富山から薬を出荷します。売子たちは陸路、富山から青森まで徒歩で約20日間かけて移動し、竜飛から海路江差入りしました。売子たちは定宿を拠点にして江差市中のほか、時には日本海沿岸の漁場まで行商しました。この販売方法が富山の売薬商が始めた独特な「預け置き販売」、いわゆる「先用後利」の商法です。

北海道で富山の売薬商の姿が急増するのは、富山県から多くの移住者が見られる明治時代半ば以降です。1888（明治21）年、当時、富山の売薬商の数は5,924人でしたが、1892（同25）年には6,880人、1907（同40）年には11,126人に急増しました。これに合わせて、富山売薬の生産額も1892（明治25）年の873,000円が1912（大正元）年には5,025,000円と上がり、単に売薬商の数が増加しただけではなく、道内で新規に顧客を獲得していたことがわかります。

話を江戸時代に戻しますと、富山売薬と北前船との関わりでは、薩摩藩内での行商活動に特徴を見出せます。当時、薩摩藩はいわゆる二重鎖国を敷き、富山の売薬商は薩摩領内で売薬行商を禁じる「差留」を受けていました。薩摩領内で行商しても売上金を富山に持って帰ることができなかったのです。そこで売薬商は、薩摩藩が清国との交易強化を図って財政立て直しを模索していたことに目をつけ、清国で重用されていた蝦夷地産の昆布を北前船ルートで薩摩藩に送り、差留を解除させることに成功しました。薩摩藩はその昆布を琉球王国経由で清国に送り、その見返りとして、富山の売薬商に清国の麝香や竜腦などの薬の原料を還元することで大きな利益を得ることになりました。



開拓の村の建造物内に展示している預箱（薬箱）



住吉神社（小樽市）の大鳥居



旧青山家漁家住宅に展示している三平皿

3 船体安定に積載された石材と瓦

松前藩主の墓には、江戸時代天明期以前は越前産の笏谷石、西廻り航路を北前船が頻りに往来して以降は、西日本に産出する御影石が使われました。1897（明治30）年に住吉神社（小樽市）に建てられた大鳥居にも御影石が使われています。なぜ、道内の日本海沿岸地域に本州産の石材が多用されているかといえば、北前船の船体を安定させるために船に石を積載し、それを北海道の寄港地で降ろしたためといわれています。

松前藩主松前家墓所は、松前家19代、300年の累世藩主と一門の55基がある墓所です。墓の石材は、建立年代の古いものは緑色凝灰岩と砂岩で、新しいものは花崗岩すなわち御影石です。緑色凝灰岩は越前の笏谷石、花崗岩は瀬戸内産でいずれも北前船で運ばれました。

瓦も北前船の船体安定に積み込まれました。瓦は淡路（兵庫県）、石州（島根県）、若狭（福井県）が三大産地として有名で、旧小樽倉庫（小樽市総合博物館運河館及び運河プラザ）の屋根には長らく、北前船で運ばれた黒い色が特徴の若狭瓦が使われていました。現在は、開拓の村の旧青山家漁家住宅等と同じく、耐寒性がある三州いぶし瓦（愛知県）が使われています。

4 やきもの

九州地方の有田、波佐見焼をはじめ、瀬戸内の鞆（広島県福山市）で焼かれた酢徳利や山陰地方の酒徳利など、北前船の寄港地周辺で製作された様々なやきものが北海道へと運ばれました。現に、開拓の村の旧青山家漁家住宅と余市町の福原漁場には「因幡鳥取吉村醸造」と書かれた同じ酒徳利が展示されていますし、北海道博物館には「備後鞆津」と書かれた広島県福山市の鞆で製造された酢徳利が収蔵されています。

ここでは、旧青山家漁家住宅で見ることができる「三平皿」を紹介します。三平皿とは、皿の分類名の専門用語ではなく、北海道内で見られる俗語で、三平汁を

盛るのに最適の皿を指します。道内に残っている三平皿は2つに分類されているようで、1つは絵付けがすべて手書きかそれと同等の秀品、もう1つは絵付け印刷で量産品という区分けです。前者は「生盛皿」とも呼ばれ、お膳にセットされた生ものを盛る器ともいわれます。後者は岐阜県土岐市駄知町で生産されたもので、この駄知産三平皿は三平皿の代名詞といっても過言ではありません。開拓の村の旧青山家漁家住宅に展示している三平皿も駄知産です。駄知産の三平皿は、製作工程で「生がけ」といって素焼きせずに成型後に乾燥してから絵付け、釉^{くすり}がけを行い、一度に焼成することに特徴があり、コストダウンによって量産化を可能にしました。また、絵付けが型紙による印判染付であることも駄知産の特徴の一つです。

駄知産三平皿の生産に関わる沿革や北海道への流通過程は不明な点が多いですが、毎年80~100万枚製造され、大半が北海道に送られたなかで、その90%が函館と小樽港に積み下ろされました。1915（大正4）年の記録では、産地の卸価格が一枚につき1銭~1銭2、3厘、北海道までの輸送費は150枚につき40銭で、道内の市場価格は一枚3銭ないし4銭になりました。

さて、北前船で運ばれてきた酢徳利や酒徳利はその役割を終えた後、醤油や飲料水、油、牛乳などを入れたり、塩辛の貯蔵、湯たんぽなどに再利用されたそうです。

5 小樽運河の倉庫群

小樽運河が完成するのは1923（大正12）年で、運河沿いの石造倉庫群が形成されたのはそれ以前の明治時代です。小樽が特別輸港に指定された1889（明治22）年、面積38,000坪に及ぶ海岸埋立地が造成され、約2.5kmの海岸線に1898（同31）年には108棟の木骨石造の倉庫群が形成されました。小樽駅からまっすぐ海



北前船主たちの倉庫が建ち並ぶ北運河

岸に向かって下り、同運河に面する地に建つ小樽倉庫は、1890（同23）年から1894（同27）年に建築されました。同倉庫の創立者は西出孫左衛門と西谷庄八で、共に加賀橋立（石川県）の北前船主です。創建当時の1895（同28）年頃の倉庫は、近江商人と越後商人の二大勢力によって北前船による経済活動によって町の整備を図っていました。当初は近江商人に雇われた西出らでしたが、船主の立場を利用して様々な情報を収集して独立し、近江と越後の両勢力に対して新興勢力として台頭していきました。

さて、現在は「小樽運河」と呼ばれていますが、建設時は船の係留場でした。その遺構を今に伝えているのが、保存が決定した北海製罐（株）小樽工場第3倉庫や渋澤、広海、右近家の倉庫が並ぶ通称「北運河」周辺です。

小樽運河はかつて、小樽経済の基礎を築いた海運業者の倉庫が、緩やかに湾曲する運河沿いに瓦^{いらか}を連ね、小樽の歴史を象徴する風景でした。しかし、1966（昭和41）年に幹線道路（道道臨港線）を建設するために運河を埋め立てることになりました。これに対して、港町の小樽を主張する歴史遺産としての運河を守ろうとする運動が起こりました。この運動は札幌、東京、全国へと拡がり、大きなうねりとなって10年という長い時間にわたりましたが、運河の全面保存はかなわず、景観は大きく変わってしまいました。

6 北前船のルートから北海道へ

北海道には、明治から大正、昭和の戦後期にかけて全国から多くの移住者が入植し、北海道の近代化と発展に寄与してきました。1882（明治15）年から1935（昭和10）年までの間に北海道に移住した人々は、青森、秋田、新潟、宮城、富山、石川、岩手、山形、福島、福井県の順で東北と北陸地方が多く、このほか12位に徳島県、香川、広島県が14、15位にランクインしています。北陸地方と瀬戸内地方の3県は江戸期以来の北前船寄港地で、北海道との関わりが他地域と比較して深かったことは想像できます。

これらの地域のうち、開拓の村に移築復元した建造物を3つほど紹介します。

(1) なまはげの里から焼尻へ～旧秋山家漁家住宅

旧秋山家漁家住宅の創建者秋山嘉七は、1870（明治3）年、秋田県男鹿半島の南秋田郡南磯村本山門（現、男鹿市）で生まれ、1907（同40年）年頃に焼尻島に移住しました。焼尻島ではニシン刺網漁やアワビ、ウニなどの磯回り漁なりわいを生業としました。

焼尻島で刺網漁を営んだ人の多くは、秋山嘉七と同じ秋田県男鹿半島の出身者で、島の人口の80%を占めていました。隣接する天売島も男鹿半島の出身者が多いのが特徴です。また、嘉七の出身地の本山門前は「なまはげ」が祀まつられている「五社堂」が鎮座する町としても知られています。

旧秋山家漁家住宅の内部では、食事の様子や豆占いの大豆や昆布などを展示しています。その昔、ニシン漁場の節分では豆占いが流行りました。主人が囲炉裏の火近くに大豆を12粒ほど並べ、豆が白く灰になると豊漁、黒く焦げると不良、豆がはじけると強風が吹くなど、豆の焦げ具合でその年の漁を占いました。

(2) 江別で新潟の芸能を受け継ぐ～旧菊田家農家住宅

野幌神社（江別市西野幌）で秋のお祭り時に奉納されている芸能が「野幌太々神楽のっぽろだいたい かぐら」で、この地に入植した北越植民社の人々が、1898（明治31）年、郷里で受け継がれてきた三条神楽の系統にあたる太々神楽を創始し、野幌神社に奉納したことに始まり、江別市民の手によって現在に継承されています。北越植民社は、1886（同19）年、北海道移民事業を目的として現在の新潟県長岡市で設立され、同年江別太に入植しました。この地域が当時越後村と呼ばれ、現在も越後沼があるのはその名残です。

さらに同社は、1890（明治23）年以降に現在の道道江別恵庭線沿いの東野幌と西野幌一帯に約600人が入植しました。桜の名所として知られる「千古園」（東野幌）は、北越植民社の創立者の一人、関矢孫左衛門の住居跡地です。

その後、同社は浦臼おそきないの晩生内にも入植し、浦臼内（浦臼本村）の田村忠誠から蚕種製造技術を学び、当地を浦臼内と並ぶ蚕種製造地へと発展させていきます。

開拓の村に移築復元した旧菊田家農家住宅は、野幌原野に入植した新潟県魚沼郡出身者が建てたため、山間部の豪雪地帯である郷里かやぶきの茅葺屋根が特徴的な建築様式を伝えており、北海道では極めて珍しい建物です。内部の展示はハレの日（祭りの日）を表現し、野幌太々神楽のお囃子はやしが流れています。

(3) 富山の生活様式を持ち込む～旧樋口家農家住宅

旧樋口家農家住宅の創建者樋口善右衛門は富山県上市町の出身で、1893（明治26）年に現在の厚別区小野幌に入植しました。この地域は富山県出身者が多く、「越中部落」とも呼ばれました。当時この一帯は鬱蒼とした森林地帯で、炭焼きで生計を立てて資金を貯め、1897（同30）年原始林から伐り出した木材を使い、富山県の大工の手でこの家を建てました。建物内に入ると、15畳敷のヒロマの天井下に太い大面取りの角材が交差して組み上げられているのがわかります。これは、富山県や石川県能登地方で江戸時代から継承されている伝統的な民家の構造で、「ワクノウチ造り」と呼ばれます。建築費も高額だったことでしょう。

こうしたワクノウチ造りを採用した住宅は、樋口家のほかには芦別市など、富山県や石川県出身者が多い地域では建てるが多かったようです。

樋口家ではこのほかに、敷地内にケヤキを植えたり垣根を設けるなど、郷里の家回りをも再現しているのが特徴です。

樋口家は、郷里で生業としていた稲作を継承していくなかで、田畑の用水不足を打開するために近隣住民と共に土工組合の設置に奔走し、野幌原始林内に人工の灌漑用水溜池かんがいの建設に取り組みました。この池が、開拓の村からほど近くに位置する「瑞穂の池」です。



旧秋山家漁家住宅の内部展示



ハレの日を展示した旧菊田家農家住宅の内
部



旧樋口家農家住宅のワクノウチづくり
部